

(翻訳) 徐志摩「愛眉小札⁽¹⁾」[1]

1925 年 8 月 9～15 日

蟹江静夫・柳晶・王艷珍・杜娟・高媛・
馬寧澤・大島絵莉香訳⁽²⁾

星野幸代編訳

【解題】

徐志摩(1896-1931)は中国 1920 年代を代表する詩人の一人。浙江省海寧県の裕福な実業家の家に生まれ、米国コロンビア大学で修士号、ついで英国ケンブリッジ大学で聴講生となり、ロジャー・フライ、バートランド・ラッセル、G・H・ディキンソン等と交流した。帰国後は詩集を發表、新聞の文芸欄や文芸誌の編集長を務める一方、北京大学等で英文学を講じた。上海から北京へ向かう飛行機の墜落事故で逝去。いわゆる中産上流階級の出身であったため、文革中、徐志摩は中国文学史から抹殺されていた。文革後再評価され、1990 年代から続々と作品集、全集、伝記が出版されている。

徐志摩は、当時としては奔放な恋愛遍歴でも有名である。彼は親同士の取り決めて結婚した最初の妻を離縁し、女学生であった林徽因(建築家、文筆家)に恋慕したが拒絶され、間もなく社交界の花であった人妻・陸小曼と不倫関係に陥り、陸小曼は離婚し徐志摩と結婚した。このいきさつは 1999 年大陸・台湾の人気俳優が共演したドラマ『人間四月天』となり、大人気を博した。

「愛眉小札」は、徐志摩が 1925 年 8 月 9 日～31 日、9 月 5 日～17 日に陸小曼に宛てて書いた手紙である。1924 年、小曼の夫で軍人であった王賡に情事が知られたため、徐志摩の友人たちは双方のほとぼりを冷まそうと奔走し、徐志摩を特派員の名目でソ連、欧州へ送った。25 年夏に徐志摩は帰国、当時王賡は武器の売買に関する罪で獄中にあったため、胡適、劉海粟らを介して陸小曼は王賡と離婚し、翌年 8 月徐志摩と北京で結婚した。すなわち、「愛眉小札」は徐志摩が陸小曼と結ばれる望みが見えてきた一方、それがいつか目処は立たないという苛立ちのなかで書かれている。

初版『愛眉小札』(上海良友図書印刷公司、1936 年)は徐志摩の死後、陸小曼の編集で出版された。二種あり、一つは徐志摩の直筆版で、36 年 1 月 100 部限定出版、もう一つは活字で 36 年 3 月出版、「小曼序」「愛眉小札」「志摩書信」「小曼日記」が収録されていたという。(陳子善「“你是人間的四月天”——關於『愛眉小札』及其他」『愛眉小札：徐志摩致陸小曼情書』經濟日報出版社 2000 年、3-4 頁)

本稿では改行、文字スペースについては、徐志摩の手稿版である陳麦青・賀聖遂撰

『徐志摩『愛眉小札』真跡』（上海古籍出版社 1999 年）になるべく合わせた。但し、同書には消されたと思われる不自然な空白が多い。語句、文字については、趙家璧編『愛眉小札』（上海良友圖書印刷公司、普及本三版 1940 年）、韓石山編『徐志摩全集』第五卷（天津人民出版社 2005 年）、徐志摩著、陸小曼編『一本沒有顏色的書』（上海遠東出版社 2005 年）を合わせて参照した。

【星野幸代】

愛眉小札

〔一九二五年〕八月九日からの日記

「幸福はやはりあり得ないものではないのだ。」これは僕の最近の発見である。

今朝のひとときは、幸せでたまらなかった。君がいさえすれば、僕は一切のことを忘れ、何も欲しくなくなり何も必要としなくなる、僕が何もかも持っているからだ。

君と二人きりで第三者のいないとき、僕は一番楽しい。座って話してもそうだし、道を歩いてもそうだし、街へ買い物に行ってもそうだ。廐甸⁽³⁾ へ行ったことがないわけではないが、それでも今日のような楽しさがあつたらうか。愛は甘草^{カンゾウ}であり、この苦しい世の中もそれがあれば暮らしやすくなる。

眉、君は本当に聡明だ、君は本当に活潑だ、君は本当に小さな龍のようだ⁽⁴⁾。

僕は君の素朴であるのが好きで、君の派手であるのを好まない。君が青色の中国服を着れば、君の顔に一種独特の彩りが放たれ、僕はそれを見ると心の中に言葉では表せない喜びを感じる。素朴とはまことに気高い。君が着飾っているときはもちろん美しいが、その美しさはごく普通のものであり、誰もが承知^{ふだん}している、だが普段着の眉は、僕だけが賞玩することができる。

「人をもてあそべば徳を失い、物に心を奪われれば志を失う。」⁽⁵⁾ この言葉は確かに道理に適っている。

僕が憎むのは凡庸、日常、取るに足らぬこと、俗である。僕は個性の表現を好む。

僕は心が広いわけではなく、全宇宙あるいは宇宙の一部ですら決して自分の中に収めることができない。僕は心が深いわけではなく、本心がばれるのではないかといつも心配している。僕にたとえ少しばかり才能があつたとしても、それは決して天性のものではなく、無理をして得たものだ^よと信じている、それゆえに何か書く時はいつも多かれ少なかれ難産になるので、自分の唯一の拠り所は一瞬のインスピレーション⁽⁶⁾ である。僕には心の平穏がなくてはならない。眉よ、君だけが僕に心の平穏をもたらしてくれる。君の完全な甘美な崇高な愛の中で、僕は無上の心の平穏を享受している。【蟹江静夫訳】

何事も始めてはならない、始めてしまえば反復があり、ひいては習慣となる傾向があるから、恋愛中でも人はほころびに用心すべきである。ほころびが穴になったら、それは大変だ。僕は、愛し合う二人がささいなことで誤解して口げんかするのを見たことが

ある。結局、損ばかりで、利益はない。僕の故郷には「一日に十八回喧嘩しても、毎晩一緒に横になる」⁽⁷⁾ という諺がある、仲のいい夫婦でもけんかは免れないという意味だ。僕は信じない。僕は、合理的な生活の動機は愛で、知識は指針だと信じている。愛の生活も感情だけによってはいけないし、互いの理解は欠かせない。愛は理解を助ける力であり、理解は愛の成熟であり、最高の理解は靈魂の化合、それは愛の円満な功德である。

奥深くない精神⁽⁸⁾ は一つもない。ある精神を真に理解しようとするのは、一生の仕事である。この仕事はすればするほど面白くて、山をぶらつくようなものだ、ただ奥まで踏み入れないのではないかと思う。

眉、君が今日田舎に行って暮らしたいと言った言葉を、僕は聞いてとても嬉しかったけれど、君は苦勞することを覚悟しなければならない。きつといつか、君をあるところに連れて行って、君の思想と生活習慣を完全に変えさせよう。君ときたらほんとうに駄々っ子なんだから。僕は今日、ダヌンツィオ⁽⁹⁾ の『死の勝利』の結果を思い出した。だが中国人が、どうして真似できよう⁽¹⁰⁾。眉、君と僕は今から愛の生活に対して、それを実行するための十全の義務を負っているんだ。僕たちは努力しなければならない。眉、君は死ぬのが怖いかい。眉、君は生きるのが怖いかい。生きることは死ぬことよりずっと難しい。眉、正直に言えば、君が日々の生活を変えない限り、僕は日々安心できない。それなのに北京がほかでもなく君の新生活を妨げる大きな原因の一つなのだから、僕は悩まずにはいられない。

僕のこれまでの束縛は、すべて理性によって解けたのだ。だから君のも、同じ方法でできないとは、僕は信じないよ。何事もただ自分で決心しさえすれば、決心と成功の間は最短距離になる。

往々にして、一番聞きたくない話が、最も聞くべき話なんだ。

【柳晶訳】

[八月] 十日

僕は六時にもう目覚めてしまい、そのとたん君に話に来てほしいと思ったのに、今はもう九時半だ、まさか君がまだ起きていないはずはないだろう、僕は待ち切れない。

僕には一つの心があり、一つの頭があり、僕の心が動くとき、頭もまた動く。

僕は本当に天に感謝しなければならない、僕は一生の中で、もともと自分ではもう死人だと思っていたが⁽¹¹⁾、意外にもまた生活の甘味を味わうことが出来、最も完全で、最も贅沢なときを味わい楽しんでいる。僕はこれからは金持ちであり、もう不平をこぼす口実はなく、満足している。今このとき、天が崩れ落ちてきて、地が陥没し、霹靂が僕の身に落ちてきても、僕はもう死を恐れないし、死を思い煩うこともない。僕はただ感謝で胸がいっぱいだ。たとえ眉、ある日（僕のこのあり得ない想像を許してほしい）君

の心が変わって、僕を愛することを止めたら、そのとき僕の心は蓮の花托^{かたく}のように穴だらけになり、僕の熱い血がすべてその穴から流れていく。——たとえそんな悲惨な日があっても、僕はやはり不平をこぼさないと思う、君と僕の心が一度通じあった、それは不滅だからだ。神様の意思はどこでも明らかで、彼の処罰は永遠に公平だ。僕たちは永遠に批判できず、不平をこぼすことはできない。

〔八月〕十一日

なんという日を過ごしているのか。僕の心を押さえつける重みのなんと重いことか！眉よ、僕の眉、どうしたらいいか！またたく間に数えきれない事が心の中で⁽¹²⁾起伏する、憂い、苦慮、先のこと、後のこと、このペンでどうして書き表すことができるか。眉よ、僕は恐れている。世界と僕たちとは並び立たないのではないかと恐れている。僕たちが彼らを殴り倒して僕たちの思いを遂げさせなければ、彼らは僕たちを殴り倒して、死ぬまで追いまくるだけだ。眉よ、僕はものすごく悲しい、僕の胸のズキズキとした痛み、僕の両眼のキラキラとした熱い涙。僕には君が必要だ。僕はたった今君が必要なのに、どうしても僕は君と一緒に居られない。ああ、この辛さ——恋愛は苦しみだ、そう眉よ、もう疑問はない。眉よ、僕はすぐに君と死にたくてならない。ただ死だけが僕たちに希望する静けさをくれ、お互いに永遠に占有することができるからだ。眉よ、僕は君に全ての愛を捧げ、火のように熱い真心を全て君にあげよう。僕は君も同じように全ての、完全な愛を返してくれるのを待ち望んでいる。 【杜娟訳】

世の中には愛情がないわけではないが、おおかたは純粹ではなく、手落ちがある、それは値打ちがないし、ありふれていて、浅薄なのだ。僕らは気概があるのだから、ほんの少しでも警戒心をゆるめてはいけない、僕らは完璧な模範を示すべきだ。眉、恋愛というものは大事業で、難しいことだ、生死に関わり、生死を超えることだ——真の境地にたどりつこうとして、それではじめて神聖であり、そうであってこそ侵犯できないのだ。同情してくれる友人は貴重だ、僕たちには今少数の友人たちがいるが、彼らは思想、見解からしたら、中国で一流の人士だ。彼らは僕らのことを心から愛し、僕らのことを重んじ、僕らに期待してくれている。彼らは、一般人ができないことは僕らがやってのけ、一般人が夢みている境地を実現させるのを見たがっている。彼らは、敢えて言えば、僕らにその素質があること、能力があることを信じているのだ。彼らの期待は最も貴重だ、でもその同時に、僕らが担っている責任は、決して冗談ではすまない。自分に対して、友人に対して、社会に対して、天に対して、我らが最後まで奮闘し続け、完璧を遣り遂げる責任を持っている。眉、君は知っているね、僕が最近心配ごとがあまりにも多くて、夜眠れないのはもちろん、眠ってもすぐ悪夢を見てしまい、さまざまな心配ごとが毎日刀の光のように胸の内で乱れ刺すことを。眉、君もまたこのような状況に^は嵌まり

こんでしまい、自由にしゃべる機会さえない、ああ、これはどこから話し始めればいいのか！眉、僕は毎晩寝る前に考えている時、まるで毛根中の血液が一滴一滴消耗していくように感じて、鬱々としたもの思いの中で黒髪が白髪に代わってしまう。一日二十四時間、心のどこに一刻の平安があるだろうか——君と二人きりでいるひととき⁽¹³⁾をのぞけば、それは本当に貴重なときだ。眉、僕らは死にに行こうよ、ねえ、知っている？僕が君をどのくらい愛しているのか、ああ、眉！たとえば昨日の朝君から電話がかかって来なかったから、九時半から十一時にかけて、僕は本当にまるで生きながら火焙りにあっているように苦しんでいたよ、胸がどんなに高鳴り、どんなに痛かったか、わけも分からないし、言っても君は信じないだろう、僕がベッドの上で横たわってずっと歯を食いしばり、たえず寝返りをうっては喘いでいたよ！それからもう我慢できなくなって、自分で電話を取りあげたが、胸の激しい鼓動で、もう少しで気絶しそうだった。なんと君ときたらぐっすり眠りこんで目覚めていなかったんだから、僕のこの自虐的な行為はとんだお笑い草だ、でもその一方で君に分かってほしい、眉、恋に落ちた者の心理は最も複雑な心理で、最も不合理とも言えるし、最も合理的とも言えるのだ。眉、君自身の手で刀を持って僕の胸を切って、血だらけの心臓をえぐり出して取っておき、僕から君への最後の贈り物としてくれるかい？

【王艷珍訳】

今朝は寝ばけて、悪夢がずっと周囲につきまとっていた。その悪夢は本当に怖かった。あたかも誰かが妖術で僕らを隔てたかのような。僕を妖術でかどわかって車に乗せ、まるで三昼夜夜空を飛んでいた。傍らに座っているやせ細った厳肅な雰囲気夫人は、まるで運命そのもののようだった。僕は頭がもうろうとして、体は動かず、口も開かず、その妖車が僕を乗せて走るにまかせ、気がついて車を下りてきたとき、ある人が来て、君はもう他の人と婚約したと僕に告げた。僕は信じないと言ったが、君の指輪をはめた指が急に僕の目の前にちらついてきた。指輪を見た瞬間、僕はがんと頭を石板にぶつけ、悲痛な叫びをあげて、地面に倒れて死んだ。——ちょうどそこで君からの電話で目が覚めた。そのとき、目がさめてはいたが、しばらくは悲しくて不安で胸が締め付けられるようで、まるで魂が身体から抜けてしまったようだった⁽¹⁴⁾、憐れんでくれ、眉よ！僕は君とちゃんと話をしようと思ってきたのに⁽¹⁵⁾、あいにく君は医者に診てもらいに出かけなければならなかった。それで一日が暮れたが、四時以降過ごしたのは何と不自然で気づまりな時間であったことか！僕は「先生」⁽¹⁶⁾と話してはいたが、すさまじくじめじめで、僕たちの影が蓮池の丸い葉の上で揺れていて、僕の心は悲しみでいっぱいだった、眉よ、早く僕と一緒に死んでしまおう！

[八月] 十二日

恋に落ちた者の心境は確かに一分ごとに変わっていて絶対に量れないものだ。昨日は

あんなに苦しめられたのに、今日は天にのぼる心地で、何という違いだろう！このような艶福を享受出来る者が、この世に何人いることだろう。このように贅沢な光陰は、この宇宙のなかにどれだけあることだろう。昨年即興で作った、「海外纏綿として夢境に香り、魂を銷して今日燕京に^{おわ}竟る（海外で美しい夢の世界が断ちきれない、今は北京でうっとりさせられる）」ということが、まさに僕の愛しい眉の身の上にあるのだ。Bは分かってくれた^{補注1}、僕は本当に嬉しくて感激している。彼とはこうしてようやく気持ちを通じたのだから、僕は完全に彼に任せることができる。眉、君は本当に幸せだ、当代の賢哲もまた君の鏡台の前で派遣命令を待っているんだ。

眉、もう寝ていることだろう、このとき、僕たちは又夢で会うはずだ！

いうのもおかしいが、士気が異常に奮い立って来て、本当に何かをやりたい、眉、君は内で支えてくれ、僕は外へ戦いに行こう！

【高媛訳】

〔八月〕十四日

昨晩何となく気が向いて、十一時にW家に駆けつけた、もともとは〔張〕奚若と雑談しようと思ったので、彼が新鮮なクルミ、ブドウ、姫リンゴ、ハスの実を買って御馳走してくれたが、いくらも話さないうちに、奥さんが帰って来てしまい、それですべておしまいだった。続いてWとM^{補注2}が来た。一緒に中庭で坐って雑談している時に、みな腹がへったと言うので、玉子チャーハンを食べて、僕は二杯食べ、食後マージャンをして騒ぎ、僕が今晩は泊まらないといけな、泊るならご夫婦と同じベッドでなければと言ったので、Wに“死期が迫っているな、どうかしている”とまで言われた。しかし結局麻雀を八周して終わったら、僕の要求は意外に受け入れられ、三人で一緒に寢床に入り、消灯すると、MはWの胸元にぴったりよりそって、けらけらと笑い続けていた。僕は寝てるふりをしていたが、実は彼らの話がよく聞こえていたので、夜が明けるまでずっと眠れなかった。

眉、お母さんをわざわざ苦しめなくてもいいじゃないか。彼女は聡明なのだから、最後まで聡明でなければならない。彼女は僕たち二人ともがひたむきで目ぼれしやすいことを見抜いている以上、彼女は大局に目を向けるべきだ、例えば君と僕が交際することを禁止して、会うことを許さないのも一つの方法だ。そうしないなら僕達の愛情を承認するべきで、僕たちに一すじの活路を与えてくれるのが道理というものだろう。こんなふうに小さな比翼の鳥がめくばせしあうように人眼をはばかりって、一言よけいに話してもダメ、一眼よけいに見てもダメ、一手よけいに動いてもダメ、こんなのは本当にダメじゃないか⁽¹⁷⁾、実際のところこんなことしても全然関係ない、ただ人を不愉快にさせ、欺くように強要するばかりなのだから、わざわざすることないじゃないか。眉、僕はいつも真実の愛があれば勇気がわくものだと言っているね、君が僕を愛してくれる熱

意と誠意とを、僕は身体が削られて粉になっても疑うことができないが、しかし同時に君はお母さんのところでは危険を冒そうとしないばかりか、彼のところでも決断を下そうとしないんだから、生活が改まるはずがない、ただどっちつかずの状態で僕を待たせて、僕の心のどこに平安があるだろう、こんなに気が動転してはまたどうして事を処理できよう？だから僕は君がもう一歩踏み込んで僕を愛してくれることをこっそりと待ち望まずにはいられない、いずれ断固とした方法を思いついて、僕の気持ちを落ち着かせて、もっと早く堂々とした人物になって、一日も早く僕の一生の理想とする新生活を実現するんだ。眉、君は僕をいったいどんな方法で愛してくれる？

僕がいないとき君は僕のことを思い、時には熱烈に僕を思ってくれる、そう僕は信じている！しかし僕がいないと君には自分の生活があって、決してどうにもやっていけないわけじゃない。僕はいるときの方が君はもちろん嬉しいんだろけれど、僕が一番知りたいのは、眉よ、僕が君にとって“完全に必要である”か、この世の中で誰にも君にあげられないものを僕が君に与えることができるかどうか、僕が君を愛するその愛の中に君が生涯で一番完璧で、思い残すことはない満足を得ることができるかどうか、ということなんだ。この問題は最も重要だ、なぜなら恋愛が恋愛であるゆえんは、それが絶対に不変であるべきで代用もできないという点にあるからだ。ロミオはジュリエットを愛し、彼女のために死を望み、世の中に彼女のほかに誰も彼の心を動かすことはできなかった。ジュリエットはロミオを愛し、彼のために死を望み、世の中に彼のほか誰も彼女の愛を少しも分け与えられることはなかった。彼らの恋愛がずっと後世まで残り、そして高尚で、また美しいわけはそこにある。二人とも死ぬときに思い残すことはなかった、なぜなら死ぬことが彼らの恋愛を最も完全で最も円満な程度に成就させたからであり、この“Die upon a kiss [口づけによる死]”⁽¹⁸⁾は真に愛し合う者たちの理想的な結末であり、それ以上のものはない。逆にもし恋愛が取って代わることができるものであるなら、歯ブラシが古くなったら代わりを買い、服が破れたら代わりを仕立てることができるようなもので、その価値も推して知るべしだ。“婚約”——the spiritual engagement [精神的な婚約] the great mutual giving up⁽¹⁹⁾ [偉大なる相互の献身]——は偉大な事であり、二つの魂は神の前で自分の意志で結び付き合う、世の中にこれより美しいことはない——恋愛の神聖さはこの絶対性、この完全性、この不変性^{補注3}にある。だから詩人はこう言うのだ。

……the light of a whole life dies,

When love is done. [生涯の火は消えてしまう、愛が終わるとき。]⁽²⁰⁾

恋愛は人生の中心と精華なのだから、恋愛の成功は人生の成功であり、恋愛の失敗は人生の失敗だ、これは疑うべくもない。

【馬寧澤訳】
インスピレーション

眉、僕は神に感謝するよ、君が既に僕を受け入れてくれたから。こうして僕の 霊 性

は永遠の拠り所を持ち、僕の人生には最も光栄な起点ができた、僕は生涯のうちで僕自身についてもっと大きな出来事を発見するとは期待できない。ある日僕が君の愛を持てたなら、僕の命には根が生じ、僕はまさしく精神的な大富豪となる。そのために僕はこの基盤がどんなに深いのか、どんなに堅固であるのか、どれだけ侵略に抵抗する力があるのかをしっかりと見極めずにはいられない。——この人生の多くは狂風暴雨なのだから。

だから僕は君に嫌がられても構わずに、君がいったいどんな程度まで僕を愛しているか聞きたいんだ。僕が愛があれば、君はもう人生と人生の中の一切を手に入れたとして自らを慰めることができるかい？逆を言うと、もし僕が愛がなかったら、君の一生には彩りがなくなるといえるかい？さらに喩えてみるとしよう。君は蓮の実を食べることを愛し、鬼蓮^{オニバス}の実を食べることを愛し、僕の愛も愛している。ここ数日僕は蓮の実、鬼蓮の実、愛はみんな君に必要なものであると信じていて、この状況では愛は単に“付加的な必要”に過ぎない。An additional necessity [付加的な必要], 絶対的な必要ではない。例えば空気や飲食は、どちらもそれ無しに生きてはいられない。蓮があるときは蓮を食べ、鬼蓮があるときは鬼蓮を食べ、愛のあるときは愛を“食べる”。そう、しばらく経てば流行は変わり、君は今度は桃⁽²¹⁾を食べ、大きなザクロを食べようになる、そのときには僕の君への愛も蓮や鬼蓮と一緒に尽きていたとしても、代わりにザクロと同じ旬の愛が現われていて“食べ”ればいい。——君は今までと変わらない生活を送り、相変わらず踊ったり笑ったりするのか？もっとはっきり言うと、眉よ、僕は僕の愛が君の空気、飲食であり、あれば生き、欠けると生きられないようなものになることを祈っている。鬼蓮でなければ蓮の実を、その季節にはむろん好きなだけ食べて、旬が過ぎても大丈夫⁽²²⁾、ザクロや柿やオリーブを代わりにおいしく味わえるだろう。眉、君は知っているね、僕がどんなに君を愛しているか、君の愛は現在すでに僕の空気と飲食であって、一日も⁽²³⁾欠くことが出来ないほどだと。だから僕は君の世界の中で僕の愛がどんな地位を占めているかを知っておきたいんだ。

May, I miss your passionately appealing gazings and soulcommunicating glances which once so overwhelmed and ingratiated me. Suppose I die suddenly tomorrow morning. Suppose I change my heart and love somebody else, what then would you feel and what would you do. These are very cruel supposition I know, but all the same I can't help making them, such being the lover's psychology. (眉、かつて僕をひどく苦しみ、機嫌を直してくれた、君の熱烈で魅力的な視線や心のこもった一瞥が恋しいよ。もし僕が明日の朝突然死んだら、もし僕が心変わりしてほかの誰かを愛したら、そのとき君は何を感じ、何をするんだろうね。これらは非常に残酷な仮定だと僕は知っている、でもやはりせずにはいられない、それが愛する者の心理なのだから。)

【大島絵莉香訳】

Do you know what would I have done if in me coming back I should have found my love no longer mine! Try and imagine the situation and tell me what you think. (もしも僕が戻ってきたとき僕の愛しい人がもはや僕のものではないことを発見したら、僕が何をするか分かるかい。この状況を想像して⁽²⁴⁾、君がどう思うか言ってみてくれ。)

日記はもう六日目になって、僕は十～二十頁書きあげた、何を書いたかはともかくとして、君はまだ一文字も生みだしてない⁽²⁵⁾！だけど僕は君を責めない、貴人は多忙なものだし⁽²⁶⁾、君が忙しがつている⁽²⁷⁾ 大部分の責任は僕自身にあるのだから。でも僕は君が早いこと日記を書き始めて、一緒に廠甸で遊んだあの幸せな朝を記念してくれるように願っている。僕がさっき長々と書きつらねた君への問いかけは、間違いなく僕が毎日心中で悶々としている気持ちのいくさりのなだから、眉、君は僕に一、二文くらい答えてくれるべきじゃないかい？眉、日記を書いていると僕の気持ちはますます蚕の糸のように君に絡みついていく。「眉」の字を一つ書くたびに、僕は口の中で「愛しい人」と低く呼びかけ、僕の胸は君のためにちょっと高鳴る。君が以前僕に書いてくれたときも同じような状況だったのを僕は知っている。⁽²⁸⁾だから僕はもっともって君が日記を書き続けてくれるよう、また僕に少しの喜びを与えてくれ、いくらか慰めを与えてくれるように祈っている。

僕は美しい丈夫な小箱を一对買いに行つて、君と僕がここ数か月間にやり取りした手紙をおさめ、僕たちの愛の契り^{きぎ}の記念にしたいと思っている、君の考えはどう？

【星野幸代訳】

〈注〉

*『漢語大詞典』は漢語大詞典編集委員会・漢語大詞典編纂処編纂『漢語大詞典』全十二巻、上海辞書出版社1986年を指す。注のなかで「『漢語大詞典』6-308」という表記は、『漢語大詞典』第六巻308頁を指す。

(1) 陳麦青、賀聖遂撰『徐志摩『愛眉小札』真跡』上海古籍出版社1999年では、手書きでは「扎」、奥付では「札」の字を用いている。「扎 zā」では適切な意味がなく、『漢語大詞典』6-306「扎記」では、読書ノート、隨筆文の意味がある。(『漢語大詞典』6-308)「小札」は、紙数が少なめの覚え書・読書ノートなど(篇幅较小的札記等)、の意(尹世超編『標題用語詞典』商務印書館2007年)。従つて「小扎」も「小札」も意味はほぼ同じであるが、昨今では『愛眉小札』として出版されているため、「小札」を採つた。

(2) 翻訳担当順。それぞれ担当個所の末尾に担当者名を示した。いずれも名古屋大学、所属研究科及び学年は次の通り。蟹江静夫：国際言語文化研究科 D3。柳晶：国際言語文化研究科 M1。王艷珍：国際言語文化研究科 D3。杜娟：国際言語文化研究科 M1。高媛：国際言語文化研究科 D1。馬寧澤：文学研究科 M2。大島絵莉香：文学研究科 M1。

- (3) 廠甸:北京市宣武区廠甸。この一帯は元・明代に琉璃瓦を造る窯場があったことから、「琉璃廠」と呼ばれる。現在は骨董店が多く立ち並ぶ。「廟会」(縁日)も有名。
- (4) 「眉」は陸小曼の名、別名「小龍」(柴草「出生与世系」)『図説 陸小曼』哈爾濱出版社 2006、1頁)
- (5) 原文「玩人喪德、玩物喪志」(『書経(尚書)』「^{りょこう}旅獒」)。
- (6) インスピレーション:原文「靈通」。『中日辞典』第2版(小学館 2002年)は①消息によく通じている、耳ざとい、②〈方〉役に立つ、③〈方〉敏捷である、すばしこい、とする。ここでは前後の文脈から「インスピレーション」とした。
- (7) 前半の原文「一天相罵十八頭」、ここでの「頭(頭)」は、動きを数える動量詞として解釈する。(『漢語大詞典』12-296)
- (8) 原文「靈性」、ここでは「精神、精気」の意味で解釈する。ほぼ同時代の魯迅の作品「灯下漫筆」では「靈性」を次のように用いている。“占了高位、养尊处优、因此受了蛊惑、昧却靈性而贊嘆者、也还可恕的(高い地位にいて、ぜいたくに楽に暮らしているために、目がくらんで見えなくなり心霊が曇ってしまつて贊嘆する者もまだゆるせよう)”(『漢語大詞典』11-755)。
- (9) ダヌンツィオ(1863~1938) イタリア詩人、小説家、劇作家。代表作『死の勝利』において男性主人公であるジョルジョは、恋人を完全に所有しえぬのではないかという不安と心身衰弱の苦しみで死の妄想にとらわれ、ついに恋人と一緒に絶壁の縁へ身を投じた。徐志摩はダヌンツィオについてエッセイ「丹農雪鳥[ダヌンツィオ]一、緒言」「二、意大利与丹農雪鳥」「三、丹農雪鳥的青年期」「四、丹農雪鳥的作品」「五、丹農雪鳥の小説」「六、丹農雪鳥の戯劇」を執筆し、1925年5月の『晨报副刊』『晨报・文学旬刊』に断続的に発表しており、その心酔ぶりがうかがわれる。
- (10) 原文「中国人、那配!」。ここでは「那」を「哪」と解釈する。
- (11) 原文「陳死人」、死んでしばらくたった人間を指す。(『漢語大詞典』11-1009)
- (12) 原文「方寸间」ここでは、「心、脳海」、「心绪、心思、心得」の意味を採った(『漢語大詞典』6-1551)。
- (13) 原文「俄顷」。「顷刻」、「偶尔」に同じ(『漢語大詞典』1-1401)。
- (14) 原文「我那時雖則醒了、把那一陣的凄惶與悲酸、像是靈魂出了竅似的,」「把」は①「讓、使得」、②=被、③=於、(『漢語大詞典』6-420)があるが、確実な結論は下せない。ここでは文脈から②に近い意味で訳した。また「靈魂出竅」は人体の器官の穴のことであるが、ここでは「身体」と訳す。(同前、8-485)
- (15) 原文「好好的談半句鐘天」、後半の言い回しは方言かと思われ、ここでは「好好地談半天」と解釈して訳した。
- (16) 「先生」は夫に対する呼称。ここでは陸小曼の夫王賡のことと推測される。
- (17) 原文「多說一句話該、多看一眼該、多動一手該、這可不是真該,」。「該」は文末に用い、制約、禁止を示す。(『漢語大詞典』11-199「該」⑫)
- (18) シェイクスピア『オセロー』の台詞に見える。(シェイクスピア著、笹山隆編注『オセロー』大修館シェイクスピア叢書、1989、306頁)
- (19) 出典未詳。前段「婚約[定情]」の、徐志摩による英訳か。
- (20) Francis William Bourdillon(英国の詩人、1852~1921)の詩、“Light”からの引用。
- (21) 原文「蜜桃」甘い桃、または桃の一種と考えられるが、不明。

- (22) 原文「交関」、ここでは杭州方言「相関連」の意味にとった。(李栄主編『杭州方言詞典』江蘇教育出版社1998、117頁)。
- (23) 原文「一半天」、一日、半日、または比較的短い時間を指す。(『漢語大詞典』1-24)
- (24) Try and imagine = Try to imagine と解釈する。come, go, run, try, wait 等 and V で、< and V > が不定詞に相当。ex. Try and do it. = Try to do it. (『The New Groval 英和辞典』「and」7の項目参照。三省堂、2001、69頁)
- (25) 原文文末「哪 na」、呢 ne に同じ。(愛知大学『中日大辞典』増補第二版1310頁)
- (26) 他人の用事が多いことに対する敬語。俗に「貴人は多忙なり」という。(『漢語大詞典』10-150)
- (27) 原文「空忙」、ただ忙しそうな(ようにする)だけ。(愛知大学『中日大辞典』1043頁)
- (28) 四川大学出版社版にはこれについて文中に「編者注」が入っており、「陸小曼女史が「以前」書いた日記は、本書の付録の一部として収録しており、『愛眉小札』完成の二か月前に書かれたものである」とある(83頁)。

補注1 この訳は、趙家璧編『愛眉小札』(解題参照)13頁「B明白了,」による。『徐志摩『愛眉小札』真跡』(同前)では「B」は空白になっており、『徐志摩全集』第五卷(同前)、『一本沒有顏色的書』(同前)もそれにならう。「B」が誰かは不詳。

補注2 「WとM」は、趙家璧編『愛眉小札』その他の版(前掲)は「W和M」としており、ここではそれらに拠った。『徐志摩『愛眉小札』真跡』(前掲)では空白になっている。「WとM」は文脈から夫妻であることは明らかなが、誰であるかは不明。

補注3 傍点は『徐志摩『愛眉小札』真跡』(前掲)による。

